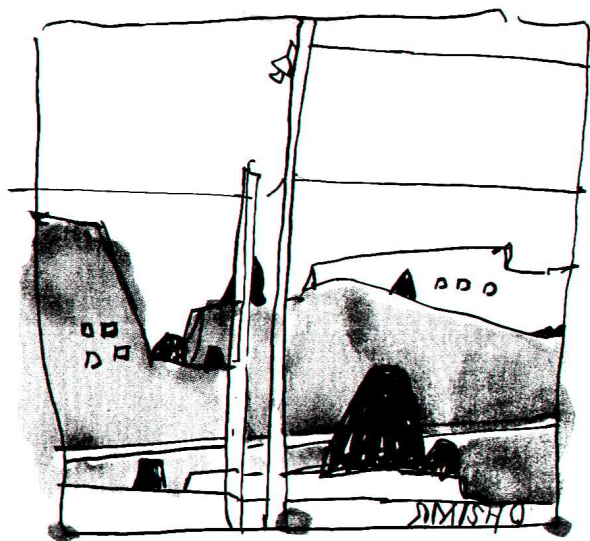


谷間の女

獅子文六



東方社版

谷 間 の 女



(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十九年五月五日発行

定価三三〇円

著 者 獅 子 文 六

発 行 者 石 渡 磨 須 子

整 版 者 内 田 柳 次 郎

発 行 所 東 京 都 文 京 区 高 田 豊 川 町 六 〇
東 方 社

振替東京五七七四番
電話大塚 八一八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

谷
間
の
女

獅
子
文
六

目次

レモネードさん	5
値遇反遇	20
ノゾキということ	30
タオル事件	40
愚連隊	46
鹿兒島と江ノ浦	56
老球友	63
二つの白い小さな球	72
巴里天国	78
巴里のレニン	85
東條さん	104

大いに生む女優
 負けざらい
 寝正月
 かくの如き食事
 酒の研究
 バナナ禅語
 榎稻荷と榎病院
 てんやわんやの話
 銀座にて
 ブロンディ一家
 谷間の女
 故郷見物

242 223 217 209 201 182 177 164 154 151 129 125

裝
幀

御

正

伸

レモネードさん

M新聞学芸部のM君と、その新聞の横浜支局の人たちと、私は、キャバレ・コバカニスーナの軒を潜った。

軒を潜ったといつても、コンクリートの狭いアーチのような入口であり、その右側に、飾窓があつて、商品の代りに、ストリップ・ガールの写真などが、陳列してある。また、左側の方は、椰子の木の下に南洋美人が立つてゐる大きな絵看板があるが、俗悪といつても、西洋式俗悪の構図や色調であつて、浅草の同類絵画の趣きがちがうところが面白い。その看板に、いろいろラクガキがしてある。これまた、英語の低級な文句であり、西洋式ワイセツ画である。月給を費い果して、キャバレに入る能力を欠いたG・Iなどが、そんな悪戯を試みるのであらう。

「さア、どうぞ、こちらへ……」

と、キャバレ支配人のNさんが、案内してくれた。狭い階段を地下室へ降りると、クロッカーがあり、その先きにバーがあつて、そこからホールが展ける。正面に低い舞台があり、バンドが

列んで、中央に二三組の洋人が、ダンサーを抱えて踊っている。両側に、ボックス式の座席が列んでいる一つに、導かれる。

キャバレというものに入るのは、初めてであつて、一向、見当がつかない。第一、ひどく照明を暗くして、緑色の薄闇の如きものを、漲らせている。模造の椰子やバナナの木を、やたらに立ててあるのは、コバカニスーナという家号が、南米かどこかの地名である因縁であろう。しかしこうまで、暗くする必要はない。テーブルの上に、紅いシェードのスタンドが灯つて、読書慾なぞ唆るのである。

支配人が、黒いドレスを着た年増美人を連れてきて、私たちの接待をさせる。この店の古参で、頭株らしい。ビールを注いだり、薦めたりする手順も、気がきいてる。

「このひとは、オコンチャンといひまして、開店当時からいますから、何でも知つています。何でも、訊いてやつて下さい」

と、支配人が、年増美人を紹介する。

私は遊びにきたのではなく、といつて、是非、小説のタネをとらねばならぬというわけでもなく漫然たるものなのだが、先方では後者ときめているらしい。好意を無にしても悪いから、

「兵隊さんは、どんな遊びをしますか」

「黒い兵隊と、白い兵隊と、どつちが上客ですか」

などと、質問した。オコンチャンは、愛想タツプリに、それらの愚問に対して、精細な答えをしてくれた。しかし、私の想像していたほど、彼女はG・Iを尊重していない形跡が言葉の奥に感じられた。無論人格的観点からではない。遊客として消費額の点に於てである。

「この頃は、G・Iもセチ辛くなりまして、安い所ばかり、漁つて歩きますからね。ハデに費うのは、朝鮮帰りぐらいなもんですわ」

彼女は、スペイン風の結髪と、同様な化粧の顔に、世帯染みた表情を浮かべた。他のダンサーと比べると、彼女は遙かに洗煉された趣味の持主らしいが、それだけ、年増臭くもあつた。顔の道具が整い過ぎその手入れが届き過ぎて、何か非人間的な印象を与えた。よく考えたら、白狐の表情に似ており、それでオコンチャンかと理解したが、勿論、口に出しはしなかつた。

「すると、一番、お金を費うのは、バイヤーですか」

「そうですね。バイヤーの方も、見えますけれど、数が少ないですわ。それよりも、なんといつても、セーラーですね、気前よく、遊んでいくのは……」

そうだ、外国船員というものがいたのだと、私は、自分の迂濶を知つた。戦前の横浜で、チャブ屋遊びをするのは、概ね、彼等だつた。戦後、貿易は振わないといつても、駐留軍がいる限り、

軍需品を運ぶ船舶の出入は、多いわけで、セーラーがこういう場所を賑わすのは、当然のことだ。なんでも、G・Iがハバをきかしてと思うのは、私たちのヒガミであろう。

「なるほどね。昔から、船員の費いッ振りは、よかつたですからね」

「それに、本町通りに、シーメンス・クラブができてから、ここが、近いでしょう。どうしても、大勢くるわけですわ……。ほら、あすこで踊つてゐるのも、セーラーですわよ」

「へえ、あれが、アメさんですかね。顔だが、少し、ちがうようですが……」

「あら、あの人、ギリシャ人——船員は、アメリカ人が、少ないですわ。オランダ人とか、トルコ人、ハンガリア人、モンテネグロ人——それから、黒さん……」

またしても、私はミスを犯した。なんでも、アメリカ人の仕業と、きめてしまふ傾向がある。

オコンチャンは、結局、船員であり、且つ黒人である客が、最も金をよく費うということを教えてくれたが、馴染みの客でもきたのか、ちよいと、席を外していつた。

「君、本番と花番というのは、どういう意味ですかね」

私は、今度は、M記者に質問を發した。というのは、卓上に置いてある、立派な印刷のメニューを開けてみると、

——パートナアのサービス料は、お客様の御任意であります、幸にして御意を得ますれば、

本番3000円、花番2000円の標準で御座居ますが、その他の御配慮は絶対に御辞退申し上げます。

支配人

と、邦字で印刷してあり、その上に、英文で同じ意味の活字が列んでいるが、本番と花番に該当する文句が見当らなかつた。これは和文英訳家の手抜きというよりも、適訳の文字を探すのが、面倒臭かつたためと、思われた。

「本番というのは、つまり、その客に専任的主動的サービスをする意味で、花番は從属的第二義的といひますか……」

学芸記者なんていうものは、どうしても、文芸評論家の感化を受けるらしい。

私は不粹で、キャバレなぞ知らないから、研究しようと思うのだが、大体、キャフェと似たものらしい。オコンチャン以下の女性はダンサーというのか、女給というのか。パートナーというのは、ダンスを共にする意味らしいが、酒席を共にする方が主らしいとすると、結局、女給が踊る技術を心得てることになるではないか。雰囲気も、戦前の銀座裏キャフェと、あまり異らない。外国のキャバレは、両三度、訪れたが、まるで、趣きがちがう。しかし、日本のキャフェ形態は、外国にないから、むこうの人にはもの珍しく、名称なんか、どうでもいいのだろう。少し退屈してきて、私は、メニューの値段表を読むことにした。これも、研究の一助である。

ワン・コース・ディナーの項目は、料理なんか、客があまり食わないとみえて、品数が少い。コンソメ200円に対して、サロイン・ステーキ300円は安い。或いはコンソメが高いのである。海老フライ300円。サンドウィッチ200円。値段が大ザッパで、どれにも50円という半端がない。

ドリンクスと書かれた方は、スコッチ・ウイスキー、300円。カクテル、200円—300円、お客は何を飲んだるか、周囲を見廻すと、G・Iも、セーラーも、全部がビールばかり、これが、300円。ちよつと、高い。

ソフト・ドリンクスの方は、全部が100円均一。ジンジャー・エール。ライム・エール。レモネード等。

とにかく、日本のかかる場所のように、値段表がコセコセしてないのは、気に入つたが、研究をやめて、他日、遊びに来ようという量見にはならない。

そこへ、オコンチャンが帰つてきた。

「面白いお客さんが、きてるんですけど、連れてきましょうか」

「外人ですか……少し窮屈じゃないかな」

「いいえ、それが、とても、気の置けない人——お客というより、地廻りみたいな人なんです」

「へえ、外人のヨタモンが、いるんですか」

「いいえ、不良つてわけじゃないんですの。セーラーなんですけど、お金がなくなつちやつて、まア、ガイドみたいなことしてるもんですから、シーメンス・クラブへくる人なんかを、連れてくるんですよ。もう、一年近く横浜にいるもんで、日本語も、達者ですわ」

「船員で、一年も、陸に居るのは変ですね。脱船者ですか」

横浜のパン嬢に夢中になつて、船の出帆に間に合わず、そのまま、非合法的な在留外人となり、密輸の手伝いや、自動車強盗など働く脱船船員がいることを、その日、私はK警察署で聞いていた。

「いいえ、それとも、ちがうんです。負傷して、船を降りたんですから……。ただ、体が癒つても、船へ乗る気がなくなつて、遊んでるんですの。負傷が原因で、少し、頭がオカしくなつたらいいんですわ。いろんなこと、みんな、忘れちまう病氣……」

「記憶喪失症ですな」

「ええ、この頃は、よほど癒つてきましたけど、一時は、自分の名まで、忘れちまつたくらい……。尤も、あたしたちは、本名でなく、レモちゃんという渾名で、呼んでいましたけど……」

「レモちゃん？ どういう意味ですか」

「その人、以前は、気前よく遊んだんですけど、お金がなくなつてから、いつも、レモネード一本しか、注文しないんです。それで、レモネードさんて、名がついたんです……」

「なるほど、一本100円で、一番、安いからですね」

私は、先刻^{さうき}見たメニューの値段表を、思い出したが、急に、その人物が面白くなつてきた。豪遊した過去を持ちながら、毎夜、平然と、レモネード一本で、遊びにくるなんて、江戸時代の粋客の面影があるではないか。

「じゃア、一つ、その人に会わせて下さい。先方で、差支えなかつたら……」

私は、オコンチャンに、依頼する氣になつた。

ほどなく、オコンチャンは、模造椰子の葉影から、二人連れで現れた。その男がレモネードさんであることは、疑いもないが、私は、最初、日本人ではないかと思つたほど、背の高さも中位で、髪が黒く、眼鼻立ちが優しかつた。そして、まだ、二十そこそこの年若さなのに、驚いたが、着ているものが、薄汚れたジャンパーであるのは、西洋の夕霧伊左衛門氏に、相応^{あきあ}しいと思つた。

「コンバンワ。ゴ機嫌イカガ？」

彼は、極めて愛想よく、私たちに手を差出し、テーブルに加わつた。外人特有の贅言だが、何

か、詰屈な調子があつた。或いは、ドモリではないかと、疑わせた。

さて、連れてきて貰いはしたが、話の継ぎ穂のないもので、最初は、両方とも、ニヤニヤした。私がビールを薦めると、彼は遠慮なく飲み干した。また、暫らくニヤニヤして、今度は、彼がラッキー・ストライクの袋を、私の前に出した。レモネードさんから、ものを貰つては恐縮と思つたが、外人の礼儀を尊重して、辞退しなかつた。

「あなた、船で、ケガをなすつたそうですね」

私は、そんなところから、話を切り出した。

「ええ、そう。マストから、落ちたのよ。なにも、知らなかつた……。少しも、痛くない……」彼の日本語は、女性から教わつた形跡が多分にあつた。

事故は、碇泊中に起つたので、直ちに陸の病院へ運ばれたが、療養中に、船は出帆してしまつた。しかし、船会社のエジェントが、入院料は負担してくれたし、やがて、船員組合の傷害保険金とれる見込みだから、少しも心配がない。現在は、船員会社から、一年一ドル支給されている。食事は、シーメンス・クラブで、無料で食べている。ただ、宿料だけは、日本人の下宿にいるから、払わなければならない。下宿は、野毛にある――。

そういうことを、彼は、タドタドしく語つた。野毛といえは、戦後の新繁華街で、東京なら浅

草の役目を果してゐる土地だが、そんな所へ外人が下宿してゐるのも、横浜らしかつた。日本の夜具で寝るのだそうだが、一日一ドルでは、そういう生活をする外はないだろう。しかし、大変親切な下宿で、居心地がよいと、彼は満足らしかつた。一体、彼の言葉にも、顔色にも、不安の影は、まるでなかつた。生来の楽家なのか、それとも、頭部に受けた負傷のために、少しイカれてゐるのか、その点は不明だつた。

「あなた、もう、船に乗る気はないですか」

私は、質問してみた。

「ホケンのお金とれたら、あたし、国へ帰る。それまで、横浜にゐるの。横浜、好きよ。ホントネ」

と、いかにも、現在の生活が愉しいという調子だつた。オコンチャンが、側から口を出して、彼が、このキャバレに顔を見せない夜は、殆んどないこと。入港船に、土地不案内のセーラーがあれば、ガイドになつて、ここへ連れてくるし、そういう客がなければ、自腹を切つて、レモネード一本を注文して、いつまでもネバるということ——などを語つた。

「国へ帰るツて、どこですか、お国は？」

と、私が訊くと、彼は、昂然として、